



## 馬耳東風

かつて遺跡発掘に関して「神の手」を持つ男と言われた人物がいた。それがちょうど10年前の今頃、石器を自身の手で埋めているところを新聞記者によりスクープされ大問題となった。その後の調査で、彼が発掘した石器の90%が、あらかじめ彼自身が埋めたものであることが明らかにされた。当時このニュースに接したとき、一人の男が次々とそれまでの歴史を塗り替えるような石器を発掘し続けることに関係者は誰も疑問を持たなかったのだろうかと思議に思ったものだが、それはともかく、この石器発掘ねつ造事件の影響は甚大で、以後今日に至るまで考古学を志す若者が激減したままだという。

そんな神の手ではなく、周囲から絶賛される神の手がサッカーにはあるということ先般のワールドカップで知った。ウルグアイ対ガーナの準々決勝、1-1のままの延長戦、ガーナの放ったシュートは見事ゴールかと思われた瞬間、ウルグアイの選手がなんと両手でそのボールを弾いたのである。私は当然ガーナに得点が与えられるものと思ったが、ガーナに与えられたのは得点ではなく、ペナルティキック(PK)であった。そのPKをガーナがはずして延長戦でも決着がつかず、最後のPK戦でウルグアイが勝利するという何とも後味の悪い結果となった。ゴールキーパー以外の選手は手を使ってはならず、足だけでボールに接しなければいけないというのは、サッカーという競技の基本中の基本である。その基本中の基本を犯して阻止した失点を、失点として認めず、改めて相手方にPKをやらせるという規則が私にはどうにも理解できなかった。審判が判断して、反則がなければゴールだったかどうか判断できない場合にのみPKを課すというのが公平なルールというものであろう。そうでなければ、得点されるよりは反則を犯してでもイチかバチかやってみようと思議に考えても不思議ではないから、今後も今回のようなことが起きるのは避けられな

い。野球のルールはあらゆる規則の中でもっとも完璧であると聞いたことがあるが、サッカーのルールは改善の余地がまだまだありそうである。しかし今回私がもっと驚いたのは、ウルグアイ国民の熱狂ぶりである。ウルグアイは第1回W杯の優勝国であり、国民はそれを誇りに思っていることは現地で様々なひとから聞かされ、他の中南米の国々と同様サッカー好きの国民だとは知っていた。しかしサッカーのサッカーたる根幹を否定するような反則をして勝ったことに、何の疑問も抱かず、(反則を犯した選手の)右手は神の手で左手はマリア様の手だといって無邪気にはしゃぎまくっている映像を見た時には、心底驚いた。これは、1986年メキシコで開催されたW杯でアルゼンチンのマラドーナがゴール前ハンドで押し込んだのを、マラドーナの手は神の手だともてはやしたことを下敷きにしている。サッカーでは結果さえよければ反則のハンドすら賛美するものらしい。しかしもっと驚いたのは、このことを話題にしても周囲の反応は私の期待とは裏腹であったことである。久しぶりに勝ったのだからよほどうれしいのだろうか、PKとなったのはそういうルールだから仕方がないというのである。スポーツマンシップに欠けるとかフェアじゃないという意見は皆無といってもよいほどであった。コレはどういうコトか、自分の考えがおかしいのか？それとも周りがおかしいのか？とたかがサッカーのことですいふんと思え込まされた。その結果行き着いた結論は、私はサッカーを純粹にスポーツとして見ていたのに対して、周囲の人たちはスポーツではあるがプロレスと同じように娯楽的要素の強いスポーツと理解しているのではないか、ということであった。スポーツはフェアでなければスポーツではないが、娯楽は楽しいこと、おもしろいことが最優先される。プロレスの「でき試合」を格闘技の精神にもとると言って目くじらを立てるひとはいない。サッカーの神の手騒動も、それと同様と考えれば納得がいく。

(久)